

特集記事

地理嫌い

沼田 武*

高校の研究大会での地理部会とか、いくつかの地理教育研究会には何度か出席して勉強させてもらった。そのような研究会で、地理嫌いが何%で、日本史・世界史がそれぞれ何%、政治・経済・倫理が何%という生徒へのアンケート結果を報告する発表者が何人もおられた。だから、どうすれば地理の好きな生徒が増えるのかというところまでは具体的な意見なり、研究結果なりの発表がなく、ただ結果報告で発表者の責を果たしたと思われることが何度もあった。

その点についての自分の場合はどうだったろうか。おそらく他校での一般の傾向と札幌旭丘高校の場合も同じ傾向にあったのであろうが、一度もそのようなアンケートをとったことはなく、生徒に意見を徴したこともなかった。別におもしろくない結果のであることを恐れたわけではない。それよりも、担当する単元をできるだけ教え、生徒に実力をつけ、試験のときには所定の得点をあげることができるよう、いともきびしく授業を続けたつもりだし、生徒に好き嫌いなどの感情をはさませなかった。いわば強引で、全くひとりよがりの授業を、強いて勉めさせてきたといった方が適切であつたらう。そのようなことでは悪い教師の代表かもしれない。

ところで、そのような生徒の地理嫌いを増大させた大きな理由の一つは、土地の理くつを扱わない授業を展開してきた教師に大部分の責任があるように思う。地理は暗記物ではないと、教師が口をすっぱくして反芻をくり返していても、実際の授業では事物や事象を並べたて、やっぱり暗記しなければ書けないテスト問題を出しているのだ。これには、大学入試問題にも大きな関りがある。

もう一つの困った、しかも大問題がある。それは地理教師の地理嫌いが増加の傾向にあるということを感じる。全くの独断と偏見であると指摘されるなら

ば有難いことであるが――。

地理を学び教える教師は、地理がおもしろい学問なのだということを生徒に態度で示さねばなるまい。口でおもしろいといくら言ってもだめなことは当然。また、おもしろいというためには自分で調べたこと、旅行のときの体験談、スライドなど、教材構築の中にできるだけとり入れることが大事であろうし、また、所属するサークルとか学会とか研究会などにはできるだけ出席して、人の話をきき、意見を交換し、地理とはなにか、地理教育はいかにあるべきかなどについて接する機会を数多くもつことだと思う。そのような教師の態度は、口では面白いといわなくても、生徒には自然に反映するに違いない。

校務の多忙なことを口実に、会員である会にも全く顔をみせず、ひとりよがりの地理教育観をもつだけでは、果して地理の好きな生徒を一人でも生みだせるだろうか。密度・技術などの差はあれ、いわゆる授業をすることは、2～3年の体験で誰でも可能であろう。もっとも会誌購読会員ということがあるから、所属するすべての学会なり研究会にいつも出ることは経済的理由もさることながら不可能に近い。少なくとも地理を学ぶ教師として、地理嫌いの教師とみられないようになりたいものだ。教師の見つめる眼は常に生徒の方であり、専攻した学問への奥深いとくみへの眼であり、管理職や教育委員会や父兄ではない。

(1987年の原稿を投稿せずしまっていたもの。考えていることは現在も同じである。)

* 北海学園大学